

工業高校におけるデュアルシステムの導入と意義

—三重県立桑名工業高校の実践から—

上野 久美雄 宮路 正弘

1. はじめに

桑名工業高校では、平成8年度からインターンシップを実施し、桑名商工会議所をはじめとする地元事業所との強い連携など、先進的な取組を進めてきた。この取組をさらに充実し、生徒の技術や技能の向上を図るため「専門高校等における『日本版デュアルシステム』推進事業」に応募し、平成16年度から平成18年度までデュアルシステムの実施方策の研究に取り組んできた。事業指定が終了した平成19年度以降も試行錯誤しながらデュアルシステムを継続して実施しており、本年度で9年目を迎えている。

リーマンショック以降、世界を襲った経済危機が、未だに世界経済に大きな影を残しており、自動車産業をはじめとした製造業が中心の東海地方、そして、三重県にも影響を与えている。このような経済状態の中で、高校生の就職状況も厳しいものがあり、桑名工業高校の有効求人倍率で見ると、平成21年度の9.0倍から平成22年度4.9倍、平成23年度3.9倍、平成24年度3.72倍と減少している。

しかし、このような厳しい状況の中で、本校は地元企業からの求人が多いこと、卒業生の離職率の低さが企業から評価されていることなどにより、他の学校に比較すると求人数が多い状況にある。これは本校がインターンシップやデュアルシステムに取り組んできた結果として、企業との関係が強くなったことや生徒の進路に対する意識が向上していることなどが少なからず影響しているものと思われる。

こうした取組に担当として関わってきた者として実践とデュアルシステムによる教育的な効果等について報告する。

2. インターンシップ及びデュアルシステム導入の経緯

まず、本校におけるデュアルシステムの実践の背景を箇条書きで要約する。

2-1. インターンシップ

国や県の政策動向として、3つの提言が存在した。

- 「スペシャリストへの道—職業教育の活性化方策に関する調査研究会議(最終報告)—」(平成7年3月8日)
専門高校における企業・工場等現場での学習機会の拡充
- 「今後の専門教育における在り方等について」(理科教育及び産業教育審議会答申平成10年7月23日)
生徒が在学中に就業体験を行うことをインターンシップとして奨励、専門高校における教育活動の一層の充実や生徒の勤労観・職業観の育成
- 「21世紀を展望した三重県工業教育の在り方」(三重県工業教育研究会 平成9年9月1日)
桑名工業高校における経緯としては、以下の事柄をあげることができる。
- 入学者の定員割れが続き、本校が整理統合の対象となりかねない状況となり、地域に愛される学校づくりを目指すこととなった。
- 「地域にある企業経営者と学校が話し合う会」(意見を聴く会)を開催し、卒業生も頑張っている桑名工業高校を育てようとの声ができるようになった。
- 三重県桑名市の地域産業である鋳物の企業であるカネソウ(株)、立松鋳造(株)、辻内鋳物鉄工(株)の3社で平成8年12月10日に材料技術科2年生が体験実習を試行した。
- 平成9年度、2年生全員が12社で1日のインターンシップを実施した。
- 平成10年度、2年生全員が49社で5日間のインターンシップを開始した。

2-2. デュアルシステム

つぎに、デュアルシステム自体の政策背景としては、以下の諸提言・報告書などが指摘できる。

- 「若者自立・挑戦プラン」(平成15年6月10日)
文部科学、厚生労働、経済産業、経済財政政策担当の4大臣が合意したこと。ここで、教育・産業・労働分野の一体的な連携に基づく教育・訓練による若者の職業能力の開発・育成が必要であるとの観点

から、高等学校段階等に「日本版デュアルシステム(実務・教育連結型人材育成システム)」を導入することが要請された。

- 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(平成16年1月 文部科学省)では、実務と教育が連結した人材育成システム(デュアル教育システム)の導入が提案された。
- 「専門高校等における『日本版デュアルシステム』に関する調査研究協力者会議」報告書(平成16年2月)その報告書において、『日本版デュアルシステム(実務・教育連結型人材育成システム)』の定義とねらいが以下のように示された。
 - ・ 企業実習と教育・職業訓練の組合せ実施により若者を一人前の職業人に育てる実践的な教育・職業能力開発の仕組みであること。
 - ・ 実際の・実践的な職業知識や技術・技能を養う教育・訓練を高等学校教育に導入して生徒の資質・能力の一層の伸長を目指すものであること。
 - ・ 勤労観、職業観を育むこと、専門高校等と地域の産業・企業とのパートナーシップを確立して地域の産業・企業が求める人材など、社会に有為な人材を育成すること。
- 文部科学省が「専門高校等における『日本版デュアルシステム』推進事業」を実施(平成16年度)
- 桑名工業高校が「専門高校等における『日本版デュアルシステム』推進事業」に指定され、デュアルシステムの研究を開始(平成16年度)した。初年度は、桑原鋳工(株)、新日本工業(株)、扶桑工機(株)の3社で生徒7名が実習を行った。

3. インターンシップやデュアルシステム導入の背景

本校が導入・実践することになった政策的背景は以上の通りであるが、つぎに、どのような教育的・社会的背景が後押ししたのかを述べたい。

3-1. フリーター等の増加と高校卒業後の高い離職率

第1に、高卒者のキャリアに関する問題である。

勤労観・職業観の未熟さから高校卒業時に正規職に就職しないで、アルバイト等に就く者や、または何もしない者が増加するとともに、高校卒業後の3年間で約半数の者が離職するという状況が全国的に続き、三重県もその例外ではなかった。

また、その理由として、「人間関係をうまく築けない」、「就いた仕事が想像していたものと違った」ということが目立っていた。そこで、高校在学中に大人とのコミュ

ニケーションや企業の実際の仕事を体験するような機会の整備、生徒が地元企業を知り、企業の知識を高め、理解するための環境の整備が必要になっていた。

3-2. 工業教育の課題

次に、工業高校教育の内面的な課題への対応の必要性があった。この点は、文部科学省の各レベルでの論議において指摘された点である。その中心的な問題は、工業技術の高度化や就業構造の変化等に伴い、特に中小の事業所でも工業高校の卒業者に求められる技術・技能や資質が変化してきていたことである。

こうした中で、工業高校で学ぶ内容と、実際の産業現場で必要となる知識や技術とが合致していないとの指摘が各方面で出され、教員が産業現場の動向をより理解し、指導に生かしていく努力とより実践的な知識や技術を学ぶ仕組みが必要となっていた。

さらに、学校から企業への情報発信等、企業と学校の相互理解と連携強化も必要であった。

3-3. 桑名工業高校の課題

第3に、本校独自の課題である。

桑名工業高校では、平成14年頃まで入学希望者が募集定員を下まわり、いわゆる不本意入学や目的意識の希薄な生徒の入学の増加が続き、問題行動や中途退学者が目立つ学校であった。本校では、職員会議を再々開催し、最終的に、学校活性化のため地元企業、商工会議所の協力を得られるという環境を活かして、地域との連携を核としたキャリア教育を推進することとしたのである。

4. 桑名工業高校におけるインターンシップとデュアルシステム(企業実習)

以上のような経過で導入されたインターンシップとデュアルシステムについて、それらの目的と内容の概要を示す。

4-1. インターンシップ

インターンシップは、平成10年度より、7月上旬の月曜から金曜までの5日間実施している。平成23年度は2年生全員(159人)が72社で実習を「産業現場実習」という名称で実施した。また、平成12年度より、希望する生徒が夏休み等の休業期間中にさらに5日間参加するインターンシップを「産業現場実習パートII」(増加1単位認定)として実施している。

インターンシップの目的は、主に製造業で実際の産

業現場を知ること、学習意欲の向上や職業に対する理解を深めることである。

本校では、上記の「産業現場実習パートⅡ」のみ、増加単位を認定し、通常のインターンシップと後述の1年生の短期企業実習を特別教育活動の枠内で、教育課程上の位置づけを行っている。

4-2. デュアルシステム

デュアルシステムは、下記に示すように1年生で5日間の短期企業実習と呼ぶ実習を2社でそれぞれ体験し、2年生以降に本格的なデュアルシステムを行う企業を決定することになっている。2年生と3年生では、希望する生徒は、5月下旬から11月下旬にかけて、毎週特定の曜日に企業で1日の実習を実施する。原則として、1企業(事業所)に生徒2名が配置され、生徒は希望する仕事(業務)が体験できる企業で実習を行う。また、2年生で参加した生徒は原則3年生でも参加できる。

デュアルシステムの目的は、第1に生徒が最新技術や地場産業の技術を経験・習得することで、知識や技術・技能の定着及び学習意欲の喚起を図ることにある。ついで、生徒が地域企業の業務内容を理解するとともに、ものづくりの大切さ、すばらしさを学ぶことである。さらに、企業の一員として参加し、社会人としてのマナーを体得するとともに、生徒の勤労観や職業意識及び進路選択能力を育成することも重要である。

教育課程上の位置づけに関して、デュアルシステムは、学校設定科目として、2年生で「企業実習Ⅰ」、3年生で「企業実習Ⅱ」を開設し、7単位に位置づけている。7単位の内、6単位を企業での実習により認定し、1単位を学校での月曜日の1限目の授業とし、学校において実施しレポートの作成・準備等に充てている。以下、平成24年度の例で具体的に示す。

平成24年度1年生の短期企業実習

①期日

第1回「短期企業実習」

12月10日(月)～14日(金)の5日間

第2回「短期企業実習」

2月14日(木)～20日(水)の5日間

②参加生徒数：第1回21名 第2回16名

③企業数：第1回10社 第2回8社

平成24年度2年生と3年生の企業実習

①実習期間

<2年生>平成24年5月22日～ 毎週火曜日

<3年生>平成24年5月23日～ 毎週水曜日

②参加生徒数：2年生10名 3年生21名

③企業数：2年生5社 3年生11社

デュアルシステム参加生徒数の推移を見ると、年度によりばらつきがあるが、表1に示すように2年生、3年生合わせて30数名となっている。現状では、担当する教員の数、受け入れ企業数などの点から希望者が多数になると全員を参加させることは難しい面がある。

また、桑名工業高校には機械系学科2学級と電気系学科2学級があるが、デュアルシステム開始当初から電気系の生徒の参加が少ない状況にある。これは、電気系企業は中小企業でも製造工程を含め、多くの場面で高度な技術を必要としたり、またその技術が部外秘であることなどの理由により受け入れに消極的な企業が多いことがあげられる。さらに、生徒側の理由として、電気科の生徒には、電気系学科で所定の授業を受講しないと電気主任技術者資格や電気工事士の実技試験免除が受けられないという理由で参加しない生徒も多い。

表1 デュアルシステム参加生徒数の推移

	2年		3年	
	機械系	電気系	機械系	電気系
平成17年度	7名	0名		
平成18年度	10名	1名	7名	0名
平成19年度	12名	2名	10名	1名
平成20年度	16名	2名	11名	2名
平成21年度	19名	3名	16名	2名
平成22年度	11名	2名	19名	3名
平成23年度	17名	5名	11名	2名
平成24年度	8名	2名	16名	5名

4-3. デュアルシステムの実施方法について

わが国の高校において実施されているデュアルシステムには、大別すると2つの方法があり、一定期間連続して実習を行う方法と毎週1日または2日のように年間を通じて実習を行う方法がある。それぞれの特色と、本校での実施方法について整理しておく。

①一定期間連続して実習を行う方法

企業の一部には連続した実習の受け入れを希望する声がある。たしかに、連続して実習を行う方が生徒の技術等の習得には効果的であるが、学校における授業との関係から10日間程度となっている場合が多い。

他方、この方法は特定の学科やコースの生徒全員が実施する場合に適している。ただし、希望する生

徒のみが実習を行う場合には、企業で実習を行った期間の授業について補習を行う必要がある。

②年間を通じて実習を行う方法

この方法の場合、高校の週時程に位置づけて実施することができるため、学校の教育活動を大きく変更する必要がない。また、学校の授業と併せて「企業実習」を行うことができる。しかし、他の工業の科目と「企業実習」との選択となるため、希望者を対象とした実習には適しているが、参加した生徒は幅広い学習が不足する。

③桑名工業高校における実施方法

本校の「桑名方式」は、年間を通じて実習を行う方法で実施した。これは、希望者を対象としていたこと、授業の一部として教育課程に位置づけて担当教員を割り当て継続して実施していく予定であったことが理由である。開始当初は5月中旬から1月末までの企業実習を行っていたが、生徒が工業で学習すべき基礎的な知識や技術を学ぶことができないという課題が生じたため、5月下旬から11月末までの期間とし、前後の期間に学校での基礎的な学習を行うこととして現在に至っている。

4-4.デュアルシステム継続のための環境整備について

デュアルシステムを実施するためには、なによりも実習を受け入れてくれる企業の確保が重要であるとともに、受入企業、学校ともに担当者等の負担も大きいことから、継続して実施していくためには一定の環境整備が必要である。桑名工業高校でデュアルシステムが継続している理由は以下の通りである。

まず、商工会議所及び地元企業との関係が良好なことである。桑名工業高校では、前述したとおり、平成8年度からインターンシップを実施し、「桑名方式」と呼ばれる商工会議所が中心となって受け入れ企業を斡旋する方法が定着し、企業との関係が深まっている。

また、企業にとって、デュアルシステムの実習生を受け入れるメリットの構築に努めてきた。ただし、それは金銭的なことや実習を直ちに採用の機会と考えるようなものではない。

デュアルシステムを受け入れている企業は、社会貢献の一環として学校教育に協力することで企業内外での評価を求めている場合が多く、企業のメリットとして県教育委員会による感謝状贈呈や学校ホームページへの企業名の掲載などに努めている。

なお、桑名商工会議所及び協力企業数社が県教育委員会の推薦により文部科学省のキャリア教育優良団体表

彰を受けていることも特筆される。

もちろん、デュアルシステムを受け入れる企業のメリットの1つに、人材の確保がある。デュアルシステムを受け入れる企業の多くは中小企業であり、工業高校卒業生を採用したいと考える企業が多く、将来Uターンで地元に戻る人材も含め人材の育成・確保につながることを期待していることも付記しておきたい。

桑名工業高校の方針としては、「地域とともに歩むものづくり」をスローガンに地域に密着した工業高校として、地域のものづくりを支える人材の育成を目指しており、トータルに地域の人材育成を進めるという方針を生徒にも明確に示しているため、そのことによって、結果として生徒も地元への就職を意識することにつながっている。

5. デュアルシステム実施の意義について

5-1.デュアルシステムと就職

まず、デュアルシステムの企業側の評価を、協力企業による実習生の採用という点から見てみる。

桑名工業高校における就職者のうちデュアルシステム協力企業に就職した生徒の数は表2の通りである（実際にデュアルシステムを行っていない生徒も含む）。

表2 デュアルシステム協力企業への就職者数

年 度	H22	H23	H24
会社数	6社	5社	6社
就職者数	7名	7名	8名

平成23年度のデータで特徴を見ると、5社すべてが近隣の工業高校（四日市工業高校、四日市中央工業高校）からの採用は無く、桑名工業高校卒業生だけを採用している。この結果から考えると、企業実習が地域企業と桑名工業高校の結びつきを強くしていることが明らかである。また、その中のT社は高校の新卒者を教育する採用していなかったが、デュアルシステムで高校（教員）と会話する機会を持ち、実際に高校生の技術指導を担当したことで、自社で新卒者を育てる良さを感じ求人を開始した。

デュアルシステムの実施により、地域の中小企業の立場からすると、目的を持った高校生をうまく育て理解を得れば、大企業でなくとも優秀な新卒者を採用することができることになる。学校の立場からすると、数ある企業の中で生徒が従業員や作業内容まで知っている企業であれば、「この企業の仕事はどんな製品を造り、こんな作業をしている」と詳しくわかるので、就職先としてミスマッチを防ぐことになる。

参考までに関係企業への就職状況をさらに調べてみると、デュアルシステムで学習した企業に直接就職した卒業生は6年間(105名)で4名である。これらの生徒は成績とは関係なく、自らの強い意志で企業を選択し、当然現在も勤務中である。

また、学校全体の就職等の状況については、以下に示す表3、表4のように地元製造業への就職を中心として、就職希望者の就職内定率は毎年ほぼ100%を継続しているとともに、離職率についても最近の高校卒業者と比較して非常に低い状況となっている。

表3 就職状況

年度	H19	H20	H21	H22	H23	H24
求人企業数	673	697	408	332	356	390
求人倍率	9.92	8.99	4.84	3.87	3.97	3.72
希望者数	107	124	116	120	117	138
就職内定率(%)	100	99	97	100	100	100

表4 離職状況

年度	H17	H18	H19	H20	H21	H22
希望者数	100	111	107	124	116	120
離職者数	29	18	8	5	3	6

※平成23年7月桑名工業高校調べ

※桑名工業高校定員160名(機械系80名、電気系80名)

※表4の数値は、入社2ヶ月以後にその年度の卒業生が入社した企業を訪問して、過去に入社した卒業生も含めて就業状況を確認したものであり、100%ではないが卒業生の動向をデータとして保管している数。

5-2. デュアルシステムと教員の企業理解

デュアルシステム、インターンシップでの教育を受けた桑名工業高校の生徒は、職種、業務内容で就職する企業を選択する傾向にある。具体的には、自動車部品製造会社にと製品名をあげる生徒以外に、「自分は定位置で細かな作業をするにはむかないので、連続した単調な仕事ではなく、工場内を大きく動ける仕事がいい」、「考えて働くのが苦手なので、単調で何も考えないで作業できる方がいい」などとはっきり言える生徒が増えている。進路指導も、そうした生徒の希望に重点を置いて指導できるので、企業を選択させる場合も指導しやすい。

そこで、企業の業務内容を進路指導担当者がどれほど熟知しているかが大きな問題となる。業務内容を考慮せず生徒に就職先の紹介をするだけでは、就職後に会社(仕事)が嫌になり離職につながることは容易に想像できる。

しかしながら、通常は進路指導する教員(特に進路指導担当または担任)が知識を得る機会は非常に少ないと

言える。そうした状況の中で、桑名工業高校の教員はデュアルシステムにおいて、1人が1社または2社を担当し、生徒の働く姿を確認するために、企業に出向くことになる。最も特筆されることとして、デュアルシステムにおける企業実習は授業として行うため、生徒を評価する必要性から教員は短時間の確認だけではなく、生徒の様子を一定時間観察する必要がある、その間に企業での実際の作業を知るとともに、企業で指導にあたる従業員とも会話することで、企業の考え方やニーズを知る機会にもなっている。いわばエクスターンシップを実践していると言える。

5-3. 「ものづくり」への興味関心の向上、資格等取得者の増加

デュアルシステムに取り組む中で、鋳物会社で指導を受けたことで、これまで高校では受験していなかった鋳造の技能検定を受検し、三重県内で初めて3級に合格した生徒も出てきている。その後も継続して毎年受験者がおり、平成24年度もデュアルシステムで鋳造会社で実習する2名が合格している。この他の技能検定でも、フライス盤、普通旋盤で2級合格者を出している。さらに、全国高校生ものづくり大会で優勝した生徒も排出している。

学校全体として、資格検定に関心の高い生徒が増加し、生徒一人平均5~10の資格検定に合格している。一例では、危険物取扱者で平成24年度において乙種全類(1類~6類)合格が16名、甲種合格は2名となっている。

また、デュアルシステムで直接に企業指導者から指導を受けた生徒だけではなく、教員も平成24年度では数値制御旋盤とマシニングセンタで、それぞれ技能検定1級に合格している。これらは教員がデュアルシステムで企業における技能資格等の重要性に触れ、指導する立場として技能の向上に取り組んだ結果であり、デュアルシステムの1つの成果と言える。

5-4. 入学希望者の増加

学校として、職業選択の徹底した指導に特徴を持たせたこと、就職率は例年ほぼ100%になっていること(平成24年度もすでに100%就職先決定)、生徒・卒業生の実績から求人数が確保されていることなどで、桑名工業高校の入学希望者が激増し、工業高校の本来の役割を取り戻している。また、デュアルシステム・インターンシップにより地域の企業で生徒が実習を行う中で、企業の方々から生徒が評価されていることが、学校の評価につながり結果として入学者の増加につながっていると考えられる。

6. 考察

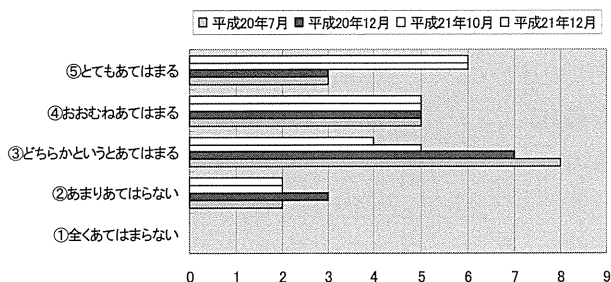
6-1. 生徒及び卒業生への影響

デュアルシステムを選択している生徒が学校でも1割前後であり、デュアルシステムを経験した生徒とそうでない生徒との差を判断することは早計であろう。しかし、デュアルシステムを選択した生徒や卒業生に対するアンケート調査の結果、デュアルシステムを経験した卒業生を受け入れた企業に対するアンケート調査の結果に注目すべき点が含まれている。

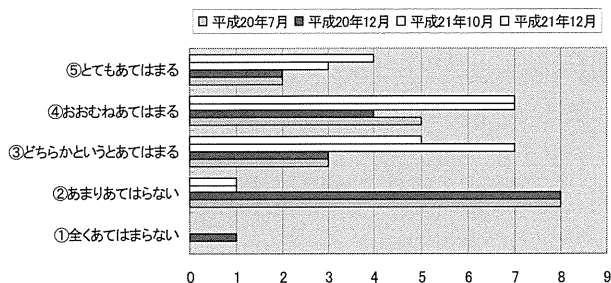
まず、平成21年度に実施したデュアルシステムの企業実習に参加した生徒（18人）に対するアンケート調査（平成20年7月、12月、平成21年7月、12月実施）の結果について見てみる。

①平成21年度 デュアルシステム参加生徒のアンケート結果（3年生18人）

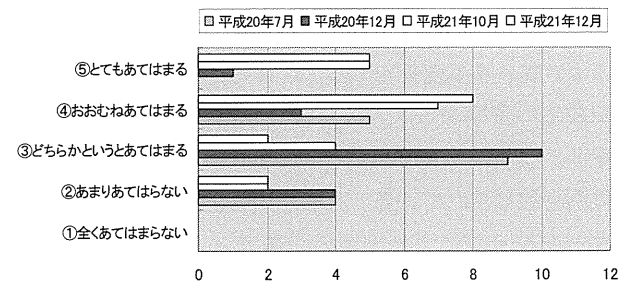
（問1）身に付けたい技術・技能、将来就きたい仕事がありますか。



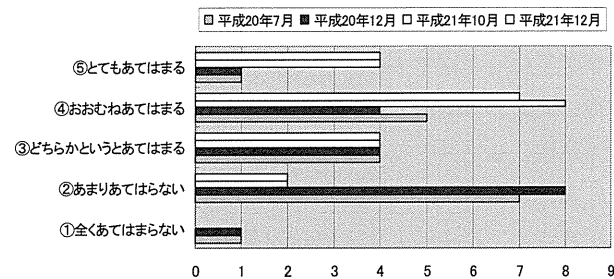
（問2）将来希望する職業や身に付けたい技術・技能に関する知識を持っていますか。



（問3）困難なことに對して努力し、やり遂げる自信がありますか。



（問4）責任のある仕事がしたいですか。



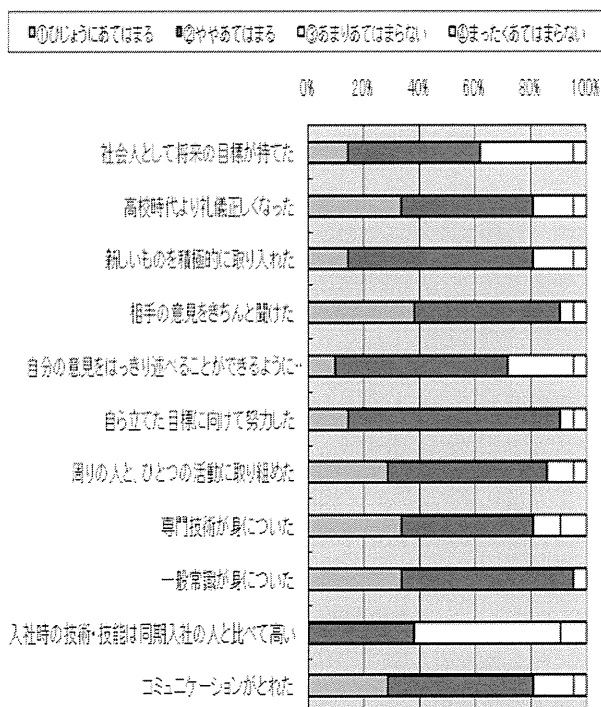
デュアルシステムに参加した生徒のアンケート結果を見ると、問1の「身に付けたい技術・技能、将来就きたい仕事がありますか」、問2の「将来希望する職業や身に付けたい技術・技能に関する知識を持っていますか。」に対する回答から、企業実習を重ねるにつれて将来就きたい仕事や、身に付けるべき技術・技能が明確になっているとともに、それに対する知識の深まりを感じている傾向があることがわかる。

問3の「困難なことに對して努力し、やり遂げる自信がありますか」、問4の「責任のある仕事がしたいですか。」に対する回答から、デュアルシステムを通じて、継続して努力することへの自信や責任感を持って仕事をすることの大切さへの理解が深まっていることがわかる。

つぎに、平成20年度のデュアルシステムに参加した卒業生（21人）及びデュアルシステムを経験した卒業生を採用している企業に対するアンケート調査の回答傾向を見てみる。

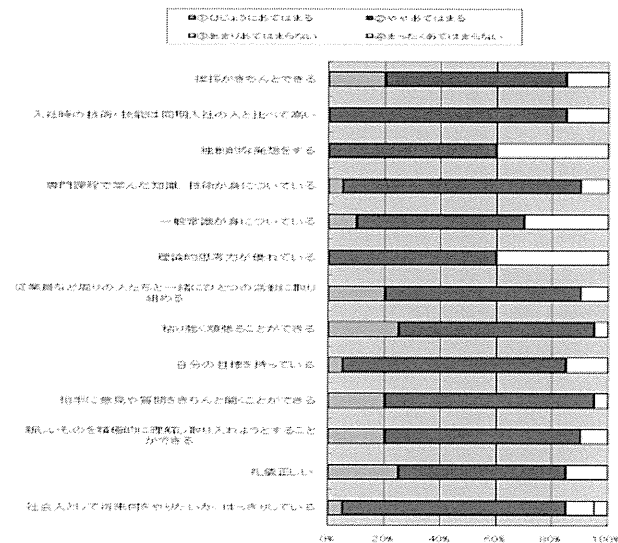
②H21年度 デュアルシステムに参加した卒業生に対するアンケート結果（21人回答）

企業実習に参加して良かったと感じる点（複数回答）



「企業実習に参加して良かったと感じる点」という質問に対して、デュアルシステムを体験して良かったこととして「一般常識が身に付いた」、「自ら目標を立てて努力した」、「相手の意見をきちんと聞けた」、「周りの人と1つの活動に取り組めた」と回答が多くなっている。

③平成21年度 桑名工業高等学校のデュアルシステムを経験した卒業生を採用している企業に対するアンケート結果（20社回答）



デュアルシステムを経験した卒業生を受け入れた企業のアンケートでは、デュアルシステムを経験している生徒について、「知識、技術が身に付いている」、「粘り強く頑張ることができる」、「周りの人たちと一緒に1つの活動に取り組める」、「相手に意見や質問を聞くことができる」などの設問で肯定的な回答が多くなっている。

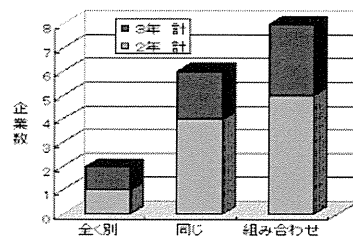
また、デュアルシステムに参加した卒業生へのアンケート結果と卒業生を受け入れた企業のアンケート結果を比較すると、「周囲と協力して活動すること」や「相手の意見を聞くこと」については、卒業生、企業双方で高い回答となっており、デュアルシステムが会社での人間関係形成能力やコミュニケーション能力の育成において効果があることが推察される。

6-2. 企業での指導体制等について

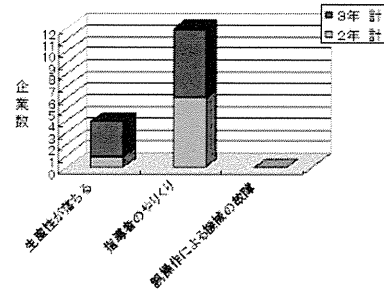
デュアルシステムの実施については、受入企業の協力体制が不可欠であり、実際の生徒の受け入れに際しての企業側の課題について考える必要がある。受入企業に対するアンケート結果は以下の通りである。

①デュアルシステム受入企業アンケート結果

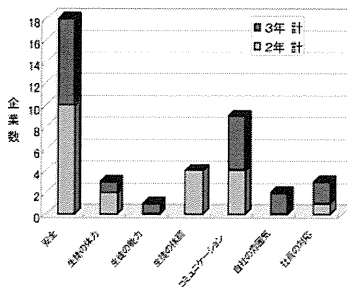
(問1) 実習内容と業務内容との関連



(問2) 実習プログラム作成で苦労した点

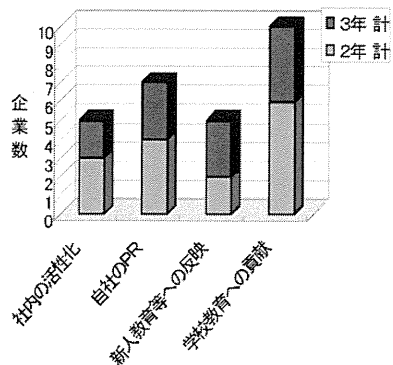


(問3) 実習受け入れにあたり特に配慮したこと



デュアルシステム受入企業のアンケート結果からは、問1の「実習内容と業務内容との関連」に対して、企業実習のプログラムについては、大半の企業が自社の業務と同じ内容を取り入れており、実際の業務を通して技術等の指導を行っていることがわかる。また、問2の「実習プログラム作成で苦労した点」に対して、効果的な実習内容の策定及び指導者の人選に苦慮していることをあげた企業が多いが、受入企業が誠実に生徒の指導を行う姿勢がうかがえる。

(問4) 生徒受け入れのメリット



(問5) 生徒受け入れのデメリット

問4の「生徒受け入れのメリット」及び問5の「生徒受け入れのデメリット」から企業における実習受け入れのメリットとしては、「学校教育への貢献」、「自社のPR」、「自社の活性化」があげられている。また、企業訪問における聞き取り調査や成果発表会において、企業実習を受け入れたことで「社員の士気が上がった。」、「実習を受け入れてから災害ゼロが続いている。」、「現場の整理整頓が進んだ。」などに加えて、「安定した採用に結びついている。」、「生徒が仕事内容を理解し、就職につながる大きなメリットとなる。」など採用に関するメリットが報告されている。一方で受け入れのデメリットとして、「指導者のやりくり」の負担をあげている企業が多くなっている。

企業では、生徒の指導にあたる担当者のやりくりに関する負担が大きいが、高校生の受け入れが社員の士気の高揚や職場環境、安全対策の見直しにつながることも、高校生の採用につながることをメリットとしていることから、デュアルシステムと就職の関係をさらに検討していく必要がある。

7. おわりに

桑名工業高校では、知識や技術・技能の定着を図ること、生徒が地域企業の業務内容を理解すること、社会人としてのマナーや職業意識を身に付けることを目的としてデュアルシステムを実施してきた。

以上、述べてきたように、地域の企業の理解、社会人としてのマナーや職業意識の育成については一定の成果があがっているが、専門的な技術等の定着については、個々の生徒によりばらつきが大きく効果的に技術等を身に付けられる仕組みにするためには改善すべき点が多くあるように思われる。

このことに関連して、企業担当者との懇談会を毎年3月に実施しているが、企業の意見として、若年者の就業に関わる課題を反映して、デュアルシステムの効果として、技術的な指導の成果よりも、コミュニケーション能力を高めることや、工業人・社会人としての常識(マナー)を身につけることを望む声がしばしば提起されている。今後、技術等の習得を目指していくためには、一層企業との協議を深め、より長いスパンで具体的な実習プログラムを策定していく必要がある。

デュアルシステムを実施するにあたっては、校務分掌の変更や転勤などにより担当者や巡回指導担当も毎年検討する必要が生じている。また、デュアルシステムに

おける企業実習については、日時の変更ができないため担当者や巡回指導担当の出張等による担当変更の困難さ、企業との調整や打ち合わせなど授業時間以外での業務の増加などの企業だけでなく学校にも様々な課題がある。

しかし、桑名工業高校では、教員がこの取組によって桑名商工会議所をはじめ地域の協力が得られることや実施することの意義を感じており、学校の中核をなす取組として、デュアルシステムやインターンシップをさらに改善を重ねつつ、充実させていくことが重要である。

筆者らが担当者として関わってきた経験から言えば、デュアルシステムが昨今の若年者の就業にかかる課題の改善に有効であるとともに、工業高校における専門教育の1つの在り方として十分に機能するものと考えている。

最後に、桑名工業高校がデュアルシステムの実践研究を実施するにあたり、実施当初から6年間にわたり指導・助言されてきた名古屋大学寺田教授に謝意を表しておきたい。